



TITLE:

1930年代ビルマ・ナショナリズム における社会主義受容の特質：タキン 党の思想形成を中心に

AUTHOR(S):

根本, 敬

CITATION:

根本, 敬. 1930年代ビルマ・ナショナリズムにおける社会主義受容の特質：タキン党の思想形成を中心に. 東南アジア研究 1990, 27(4): 427-447

ISSUE DATE:

1990-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56382>

RIGHT:

1930年代ビルマ・ナショナリズムにおける 社会主義受容の特質

——タキン党の思想形成を中心に——

根 本 敬*

The Acceptance of Socialism by Burmese Nationalists during the 1930 s

——Dòubàma Asìàyôun's Ideological Formation——

Kei NEMOTO*

This paper discusses features of the acceptance of Socialism by Burmese nationalists during the 1930 s, by looking especially into the ideological formation of the Dòubàma Asìàyôun (D. A.: We Burmans Society).

The D. A.'s ideological basis for the acceptance of Socialism can be seen in the ideological features of the group's early years, which can be characterized as Burman-centrist. To understand concretely the features of the fusion of this Burman-centrism and Socialism, the term "Kòumîn-Kòuhkyîn" is discussed in depth. The term was used from 1933 by the D.A.

to symbolize Burman-centrism; but after 1937, its meaning and usage changed radically. It came to symbolize the fusion of the ideology of Burman-centrism and Socialism. Concretely, "Kòumîn-Kòuhkyîn" began to function as a symbol of the D. A.'s assertion of complete independence, anti-capitalism, anti-imperialism, nationalization of private enterprises, equal distribution of wealth, and the formation of a government for peasants and laborers. However, it is clear that there existed little theoretical understanding of Socialism behind this assertion.

I は じ め に

1930年代、特にその後半は、ビルマの民族主義運動において、社会主義思想がかなり明確な形で受容された時期であった。主として英国経由で入ってきた社会主義諸思想は、ビルマの多くの民族主義者や政治団体に影響を

与えたといつてよい。本稿では、その中でも、1930年の結党以来、次第に独立闘争の中心勢力に成長したドバマー・アスィーアヨウン（通称タキン党：本稿では原則としてこの通称を用いる）を取り上げ、その組織発展過程における社会主義思想の受容のあり方を考察することにしたい。そのことを通して、30年代のビルマ・ナショナリズムと、外来の社会主義思想との融合の試みがいかなる特質を持っていたかを論じることとする。

その際、主要な課題は二つある。ひとつはタキン党が社会主義思想を受け入れた際、そ

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所；Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 4-51-21 Nishigahara, Kitaku, Tokyo 114, Japan

の受容基盤はいかなるものであったのか。言い換えれば社会主義思想受容以前のタキン党の思想的特徴はどのようなものであったのかを、明らかにすることである。本稿では当時タキン党が出した文書のうち、主要なものを分析することによって、同党の初期の思想的特徴を指摘することにしたい。

もうひとつの課題は、30年代半ば以降タキン党が多用した、「コウミーン・コウチーン」という言葉の出現背景と、使われ方、概念の推移、および、その社会主義思想との関連性についての解明である。「コウミーン・コウチーン」については、これまで特にその社会主義思想との関連性について指摘されたことはなかったが、本稿ではこの言葉の意味の変遷と、状況に対応した使われ方の中にこそ、タキン党の社会主義思想受容（もしくはその試み）の特徴が反映されているのではないかと仮定し、その実証的検討を試みることにする。

これら二つの課題を中心に、タキン党以外の政治団体の動向や思想をも考慮に入れながら、1930年代のビルマ・ナショナリズムが、社会主義思想をどのように受容したか、その重要な側面を明らかにしたい。

なお、本稿の資料は、筆者が文部省アジア諸国等派遣留学生として、ビルマへ留学した1985年－87年の間に集めたビルマ語の一次・二次資料と、元タキン党関係者に対するインタビューが中心になっている。

II ビルマ・ナショナリズムの勃興と タキン党の結成

ビルマにおける民族主義運動の始まりは、ふつう1906年の仏教青年会 (Bou'dàbadha Kālyanāyūwà Athîn 英語略称: YMBA) の結成に求められる。しかし、運動が高まるのは第一次世界大戦終了後からであり、特に1920

年10月の仏教青年会を母体にした、ビルマ人団体総評議会 (Myanma Taīnyīndhā Athīnmyā ī Athīnhgyou' 英語略称: GCBA) の発足が、ビルマ・ナショナリズムの勢いを高めた。その背景には、第一次世界大戦を境にビルマ人中産階級 (地主層, 商人層, 自由業および公務員層) が台頭してきたことが指摘される [Taylor 1987: 124-125]。彼らは英国による植民地国家の形成が進む中で、国家の支柱として動員される一方、植民地体制の中において大きな利益を得ていた英国人やインド人に対立する存在ともなった [ibid.]。GCBA はこれら中産階級に支持されながら、おもに都市部に根拠を置いて活動した。しかし農村部へも積極的に進出し、政治に関心を持つ僧侶 (僧侶政治家) らと共に、各地でウンターヌ・アティン (Wunthanū Athīn) という民族主義結社や、ブー・アティン (Bū Athīn) と呼ばれる地下結社を組織して、自治領の要求のほか、人頭税・戸別税の廃止要求等の決議をおこない、外国製品ボイコット並びに納税拒否等の運動を展開した。¹⁾ しかし GCBA は、英国が導入した両頭制 (the Dyarchy)²⁾ の受け入れをめぐる二度分裂し、その結果、五つ

- 1) 「ウンターヌ」は「民族主義者」もしくは「民族の志士」を意味するパーリ語起源のビルマ語。また「ブー」は「マ」(mā) と共に動詞を挟んで否定形を作る助詞だが、ここでは英国に対する「全否定」を象徴する語として使われている。ウンターヌ・アティンにせよ、ブー・アティンにせよ、彼らの戦術には当時のインド国民会議派の運動の影響が見られる。
- 2) 1923年に施行されたこの両頭制により、ビルマはインドの完全なる一州 (正知事の置かれる州) となった (それまでは準知事の置かれる州にすぎなかった)。統治機構も改革され、立法院として立法参事会が、行政府として知事および知事を補佐する行政参事会が成立した。政府機能は①ビルマ知事が管轄する保留事項部門、②ビルマ州大臣が管轄する移管事項部門、③インド政庁が直轄する中央事項の三つの部類に分けられた。

の分派組織が乱立する状態となった。それらの諸組織は反英姿勢の微妙な強弱から、さらに四分五裂して民族主義運動の統一を乱した。農村部のウンターヌ・アティンや僧侶政治家もこの分裂の影響を受け、彼ら自身内部で分裂しながら、GCBAのいずれかの派と結びつくようになった。

この間、すなわち1930年以前の段階で、社会主義思想は、僅かずつビルマへ流入し始めていた。³⁾しかし、民族主義運動にその影響は殆ど見られず、GCBAはもとより、彼らと連携しながら過激な主張を繰り広げた一部の僧侶達も、社会主義思想へ関心を示すことは稀であった。僧侶の場合、衰退した仏教の復興を目指す立場にあったほか、英国が持ち込んだ近代国家の理念そのものを拒絶する農民たちの意識を代弁する立場にもあったため、社会主義思想への関心が起こらなかったのだと思われる。

タキン党 (Thàhkin Pati) は、このような状況下において登場した。同党の正式名称ドバマー・アスィーアヨウン (Dòubàma Asiâyôun) は「我等ビルマ人協会」という意味である。当時28歳の青年であったラングーン在住のタキン・バ・タウン (Thàhkin Bà Thàun, 1902-1976) と、その仲間達によって結成され、1930年6月、その姿を公に現わした。

バ・タウンは高校生の頃からマンダレイで民族主義運動に加わり、その後のGCBAの分裂に危機感を抱いていたという。彼は1920年の学生ストライキに参加したあと、一切学校に戻らないことを決心したため、大学入試を兼ねた高等学校統一卒業試験を受験しなかった [Tin Htwûn Aun 1980: 89-90]。しかしその後、マンダレイやシュウェボウにおいて

民族学校⁴⁾の教師を勤め、後には、ファーンヴァル (J. S. Furnivall) が主催していたビルマ読書クラブ (the Burma Book Club) の編集部員となった。更に1929年からは、その卓越した英語力を買われてラングーン大学の翻訳助手を勤めるまでになったが、学生に民族主義思想を吹き込むことを禁じた当時のスロス (Sloss) 学長と対立したため、数年にして辞職することになってしまった [ibid.: 67-76]。しかし彼はその間、V. A. Renouf の *The Outline of General History* を自らビルマ語に翻訳し、1930年ウェールズ皇太子翻訳賞 (the Prince of Wales Translation Prize) を受賞、賞金100ルピーを獲得した [Dòubàma Asiâyôun Thàmâin Pyùsùyei Ahpwè 1976a: 126]。この賞金を使ってバ・タウンは新しい民族主義団体をつくろうと決心し、仲間と共に同年6月、最初のリーフレットをドバマー・アスィーアヨウンの名前で発行した。これをタキン党の始まりとみなすのが普通である。⁵⁾

4) ビルマ語でアミョウダー・チャウン (Amyôudhâ Kyâun) と呼ぶ。1920年の第一次ラングーン大学学生ストライキ (マンダレイなど一部地方都市の高校にも波及) の後、1921年から植民地教育体制へのアンチ・テーゼとして、民族主義者たちの手によって次々とつくられた学校。一時は民族大学 (Amyôudhâ Te'kàthou) まで開校した。多くは財政難のため廃校を余儀なくされたが、1939年段階でも51校が残っていた。

5) 小さなサークルのような形で始まったタキン党の正確な結成年月日を知ることは殆ど不可能であり、最初のリーフレットが出された時を同党の始まりとみなすのはやむを得ないことである。なお、最初のリーフレットの発行日を1930年5月30日とする説が一般的だが [Dòubàma Asiâyôun Thàmâin Pyùsùyei Ahpwè 1976a: 127など]、同文書の中に反インド人暴動 (5月26日-29日) がすでに終息し、安寧が回復した旨を示す部分があるため、文書は暴動終息ののちに書かれたものと判断でき、

3) 1930年以前のビルマにおける社会主義文献の普及については、ビルマ人研究者による小論 [Êi Thida 1980] がある。

タキン党という通称の由来は、よく知られているように、ドバマー・アスィーアヨウンのメンバーが自分たちの名前の前に、ビルマ固有の敬称ウー (Ū) やドオ (Do)⁶⁾ に代えて、男性はタキン (thàhkin), 女性はタキンマ (thàhkinmà) を付けて呼び合ったことに起因する。タキンとはビルマ語で「主人」の意で、「我等ビルマ人こそがビルマ国の主人である (英国人が主人なのではない)」という、強固なビルマ人意識に基づいた表現であった。また、党の正式名称であるドバマー・アスィーアヨウンのドバマー (dòu bàma) は、ビルマ語で「我等ビルマ人」を意味するが、これには英国や英国人の側にたって働く「彼らの側のビルマ人」(トゥード・バマー thu-dòu bàma) とは異なる、「真にビルマ人の利益のための働く我々の側のビルマ人」という区別が含まれていた [Thàhkin Wà Tin とのインタビュー 1986]。

なお、ここで言う「ビルマ人」とは、名目的には「英国植民地ビルマ」の被支配者すべてを意味した。タキン党は敢えて「ミャンマー」(Myanma) という狭義のビルマ民族を意味する呼称の使用を避け、「バマー」(bàma) という呼称を自らの組織名に付けたが、これはビルマ民族のみならずすべての少数民族を含むことを意味していた [Dòubàma Asìayòun Thàmain Pyùsùyei Ahpwè 1976a: 133]。しかし、のちに分析するように、初期の彼らの文書には強固なビルマ民族中心主義の傾向が窺われ、実質的には「ミャンマー」の使用を避けたことの積極的な意味を見いだすことは難しい。

同党の30年代における形成過程は三つの時期に区分することが可能である。第一の時期は同党が結成された1930年から第一回党大会

が開かれる1935年3月までであり、おもに民族主義的啓蒙団体としての性格が強かった5年間である。これを「初期タキン党」と名付けることができる。

続いて第二の時期は、第一回党大会後から1938年後半の党の分裂までの期間、すなわち、同党が党憲章・規約の制定や地方支部の整備といった、自らの組織強化に乗り出す一方、種々の政治運動に具体的・積極的に関わり、それと共にラングーン大学や各地の高校から多くの学生を吸収した3年間である。社会主義思想の受容もこの頃からはっきりしてくる。これを「中期タキン党」として区別することができる。

最後の第三の時期は、党の分裂後から1939年10月の自由ブロック (the Freedom Bloc) 結成までで、同党が農民・労働者の組織化に部分的とはいえ成功する一方、党内に共産党・人民革命党といったグループがつくられた時期である。これを「後期タキン党」と呼ぶことができる。

これ以後のタキン党は、当局の監視・弾圧が強まる中、同党の中で形成されたグループ (党内党) や、同党を利用して成長した個人が、独自性を発揮しつつ、ゆるい連合を保って反英闘争を試みてゆくことになる。従ってタキン党としてのまとまりは弱まる。その後、日本占領下になると、タキン党は日本軍によってスィンイェーダー・ウンターヌ結社 (Hsinyêdhâ Wuntanù Ahpwè) と合同させられ、翼賛政党につくりかえられたため、事実上その使命を終えることになった。戦後、元党員の一部によって党は復興されたものの、その政治的性格や規模において戦前とは全く異なった右派弱小政党と化し、二度とビルマ政治の主役になることなく消えていった。

ㄨ 従って印刷の手間などを考慮すると6月上旬に発行されたとみなすほうが賢明であろう。

6) ウーは成人男子に、ドオは成人女子につける。

III 初期タキン党の思想的特質

初期タキン党の思想は、その殆どがタキン・バ・タウンと、少数の仲間たちによって表明されたものであった。当時のバ・タウンの仲間としては、タキン・テイン・マウン(Thàhkin Thèin Maun)、タキン・フラ・ボー(Thàhkin Hlā Bo)、YMB タキン・テイン(YMB Thàhkin Tin)らがあげられる。1930年の6月から8月にかけて、彼らはドバマー・アスィーアヨウンの名前で二つのリーフレットと一つの民族歌(愛国歌)をそれぞれ発行・発表した。本章では、これら3点の資料を中心に初期タキン党の思想的特質を解明してみることにはしたい。

ドバマー・アスィーアヨウンの名前を初めて公にした最初のリーフレットは、『国家改革文書第1号』(*Nainngan pyù Sasù àhma' ti'*)と題された、タテ 27 cm, ヨコ 15 cm, 4枚8頁の文書であった。事実上バ・タウン一人によって書かれたこのリーフレットが出された1930年6月上旬は、ラングーンで反インド人暴動が吹き荒れた直後であり、⁷⁾ この文書もまさにその状況に合わせて印刷・配布されたものであった。それは同文書の一番初めに記されている次の一文に極めて明確に示されている。

(ビルマ暦) 1292年カソウン月新月日(西

暦1930年5月26日)以降、コリンガのインド人達と、その後加わったチュラヤーのインド人達⁸⁾が、理由もなくビルマ人を辱めた事件において、抵抗したために命を失ったり、傷を負った我等ビルマ人を記念するために(本文書を)記す。[*Nainngan pyù Sasù àhma' ti'* 1930 カッコ内引用者]

同文書には続いて、「ビルマは我が祖国、ビルマ文学は我が文学、ビルマ語は我が言語、ビルマの国を愛せよ、ビルマ文学を誉め讃えよ、ビルマ語を大切にせよ」[*ibid.*]という、その後一貫してタキン党のスローガンとして用いられた表現が書かれてある。そのあと「ドバマー・アスィーアヨウンの勧め」という題の序文が続き、以下、「インド人がビルマ人を侮辱した事件について」、「我々の短所」、「混血ビルマ人諸君へ」、「愚か者たちのおかげ」、「コリンガのインド人と、チュラヤーのインド人の仕業で死んだ我等ビルマ人をも記憶すべきである」という表題を持った六つの章が続いている。全体的に饒舌で独り善がりな面が見られるリーフレットではあるが、タキン党が出した最初の文書として重要なもので、以下、各章を概観してみることにしたい。

「民族同志諸君」の呼び掛けで始まる序文においては、「ビルマは諸君と我々の国ではないのか。……ビルマはビルマ人のためにあるのではないか」とビルマ人の覚醒を訴え、さらに、「ビルマ人の店を建てよ。ビルマ人の店で買うようにせよ」というスローガンが掲げられる。続いて、「同じこぼれるのなら自分の袋のなかにこぼれるほうが良い」というビルマの諺を用いて、経済力を外国人に握られている現状を反省し、ビルマ人も経済を

7) 同暴動は1930年5月26日から29日にかけて発生した。暴動の発端は、ラングーンのインド人港湾労働者が賃上げを要求してストライキに突入した際(5月10日)、経営者が対抗措置として臨時に約2,000人のビルマ人を雇用したことにある。同22日ストライキが妥結すると、職場復帰したインド人と臨時雇いのビルマ人達の間に対立が生じ、それが激しい人種暴動へと発展した。この暴動により、インド人約250人が殺害され、ビルマ人も犠牲者を出した[Khin Yi 1988: 4]。

8) コリンガはカリンガからの転化で、南インド(特にアンドラ州)出身者を指し、チュラヤーはマラバール海岸及びセイロンにおけるイスラム教徒に対する呼称である。

軽視することなく、資本を蓄えるべきであることを訴えている。そこには、「経済力があってこそ力もあるのだ。我々のビルマは我々ビルマ民族こそが支配するにふさわしい。自分の国、自分の国土で、薪を拾い水を汲む最低の生活で満足してはいけない」という素朴な表現が見られる一方、「ドイツの敗戦の原因の一つは、連合国が経済力で締め上げたことにある」といった、V. A. Renouf の世界史を翻訳したバ・タウンの歴史知識が反映されているような文も見受けられる。

「インド人がビルマ人を侮辱した事件について」においては、「我々に侮辱を加えたインド人たちに我々は感謝すべきである。なぜなら、諸君がこのように侮辱されたことによって、我々は我々の具合の悪い状況を十分に知ることができたからだ」として、単に反インド人感情をつのらせるのではなく、暴動を通じてビルマ人の置かれている現状を認識し直し、ビルマ人相互の団結を促すよう訴えている。

「我々の短所」という章においては、自分たちの生活する狭い共同体や地域（家・村）の利益のみを考えるビルマ人の習性を批判し、それを「短所である」としている。そして古代ギリシャの例をあげ、「ギリシャ人たちは学問の分野においてヨーロッパ大陸に遺産を残した人々ではあるけれども、今日の愛すべき我々ビルマ人のように、自分の家の者だけを愛し、自分の場所だけを大切にすることの短所があったので、世界を支配できるだけの力がありながら、支配できなかったばかりか、ローマ人たちの支配下に入れられてしまい、奴隷と化してしまった」と述べて、都市国家としてそれぞれ独立したまま一つの国としてまとまることのなかったギリシャを、批判的に取り上げている。従って、我々ビルマ人は「国中を自分の家として認識し、愛」さなければならないと記している。ここにも

バ・タウンの世界史の知識が反映されているように思われる。

「混血ビルマ人諸君へ」の章では、「ビルマ人でないかのごとく振る舞い、外国人のように我々国民のことを無視し冷淡」な混血ビルマ人に対して、ビルマ人としての意識を持ち、共に団結するよう呼び掛けている。「今……ビルマ人はまだ力がなく、諸君は自らをビルマ人としてまだ呼べないのであるが、いつの日か、諸君は我々もビルマ人の仲間のだと、人々に堂々と言明する時代が来るはずである」と文章は綴っている。

「愚か者たちのおかげ」という章では、インド人の攻撃にさらされながらも、ビルマ人が大敗しなかったのは、自分自身の保身に走らず、ラングーンから逃げ出さないで抵抗し、そのために犠牲になった「愚かな」ビルマ人たち（特に僧侶やバスの運転手ら）がいたおかげであるとし、暴動を「チンピラ、不良による事件」とみなしている一部の「賢い人々」のほうこそ、真に「愚か」であると逆説的な主張を展開している。

最後の「コリンガのインド人とチュラヤーのインド人の仕業で死んだ我等ビルマ人をも記憶すべきである」という章においては、「勇士を賞賛しない国に勇士は現われない」として、反インド人暴動において殺害されたビルマ人のために記念集会を開くべきことを提唱している。続いて、「戦争を欲しないのなら、戦争が起こらないように前もって準備せよ」というヨーロッパの言葉は……正しい。英、仏、独、米などの国々は戦争を欲しない。だからこそ戦争のための準備をしているのである。……我等ビルマ人よ、平和な日々を送りたいのなら、……（この）ヨーロッパの言葉を忘れてはならない」と記して文面を締めくくっている〔以上直接引用は全て *ibid.* 但しカッコ内および下線は引用者〕。

この『国家改革文書第1号』は基本的に、

ビルマ民族の現状を憂い、経済的成長、民族の団結の強化、愛国心の向上を訴える民族主義的啓蒙文書であるということができよう。タキン・バ・タウンらはそのことを訴える手段として、反インド人暴動直後のラングーンの状態を活用したものと考えられる。同暴動においては、インド人の方が圧倒的に多くの犠牲者を出したのだが [Khin Yi 1988: 4]、彼らは、インド人がビルマ人を「侮辱」したためにそのような事態が生じたものにとらえ、あからさまに反インド人感情を煽るのではなく、なぜビルマ人がその様な（インド人に侮辱される様な）惨めな状況にあるのかを考えさせようと、いろいろ文章に工夫をこらしたといえる。「国家改革」という言葉をタイトルに用いながら、具体的な政治目標や、独立獲得・自治領化への願いなどをあらわす文言は一切記されていないのは、タキン・バ・タウンらにとって国家の改革は、まずは自民族の誇りの回復としての文化運動としてイメージされたからであろう。彼らの描く国家は無論王朝時代の国家像ではなく、植民地化後、都市部のナショナリスト達が共通にその正統性を認めた近代国家としてのビルマ像であるが [Taylor 1987: 151-152]、初期のタキン党はその枠組のなかであって、敢えて文化運動を通じてビルマ人の誇りの回復を訴えようとしたのである。本文書からは彼らの民族主義思想の根源をはっきりと見てとることができる。

『国家改革文書第1号』の巻末には、引き続き第4号まで発行する旨記されてあるが [ibid.]、同文書は結局第2号までしか発行されなかった。『国家改革文書第2号』 (*Nainngan pyù Sasù àhma' hni'*) は2カ月後の1930年8月に36頁のブックレットの形で1,500部発行された。出版にあたっては商人ウー・キン・マウン (U Khin Maun) という人物が100ルピーほど援助したという [Khin

Yi 1988: 10]。内容は8章に分かれ、それぞれ「翻訳について」・「我等の国と我等の文学」・「寺院学校が科学教育の学校になった暁には」・「大理石の像」・「(緬暦)1390年」・「科学の驚異」・「科学と農業」・「成功の方法」と表題がつけられてある。本文書も長いばかりで、まとまりのある内容とはいえないが、『第1号文書』との関連上重要なものなので、各章を簡潔に紹介することにしたい。

まず「翻訳について」では、翻訳出版を活発化することによって科学技術を学び、将来独立国家になるにあたって必要とされる知識を充足させるべきだと主張している。これと関連して「我等の国と我等の文学」では、日本、中国、ロシアとの比較が論じられ、そのなかでも日本については翻訳を通じて科学技術を学び、能力を高めた国として高く評価している。

「寺院学校が科学教育の学校になった暁には」の章においては、ビルマ伝統の寺院学校がビルマ人の識字率を高めてきた役割を評価し、同校の衰退が民族の進歩を阻害したと断定している。従って今後は全国的規模の無償初等教育を実施し、そのためにも、寺院学校を科学教育を施すことのできる学校に変革していくべきであると主張している。

「大理石の像」という題の章では、かつてアジアを訪れたドイツ人たちが、東洋の人々を無限の平穏さと不動の大理石にたとえたことを取り上げ、そのような状態から脱して精力的に働くこと、事業精神を大切にすることなどを訴えている。

「(緬暦)1390年」においては、独立への願いが描かれている。緬暦1390年(西暦2028年)は同文書発行時から約100年後を意味し、必要とあらば独立まで100年でも闘うという意志が表明されている。中国の孫文の闘争が引用されている点が興味深い、具体的な独立獲得への方法論には触れられていない。

「科学の驚異」という章においては、人々が熱心に科学的知識を学び取らなければならないことを主張している。ここでは王朝時代のビルマにおいても近代科学導入の試みが見られたことを示唆しているが、これに関しては荒唐無稽な記述が見られる。⁹⁾「科学と農業」ではテーマ的に前章を受け、ビルマの人口の8割を占める農民が、いまだに原初的な農法を用いていることの問題性を指摘し、化学肥料の使用・普及というかなり具体的な提案を行なっている。

最後の「成功の方法」は、前述の「大理石の像」と共通点をもち、労働の重要性を訴えている。ただ、ここではビルマ人が好んで使うカン (kan) という「運」を意味するビルマ語を取り上げ、それが語源のパーリ語では本来「労働」を意味したと指摘し、従っていかなる事業の成功も「運」ではなく、「労働」如何によって決まると主張している。実際、カンはパーリ語の *kamma* (サンスクリット語の *karman*) からきた言葉で、「業」・「行為」・「作業」を意味する語であり、この言葉に初期タキン党は従来の受動的な意味合いではなく、より積極的な意味を与えようとしたのである。

このように、『国家改革文書第2号』は同『第1号』と比較して、独立に関する言及が見られる点において異なるが、文書自体の性格はよく似ており、ビルマ人の現在の停滞状態からの脱却を、啓蒙的に述べることに中心が置かれている。特に、いかにして停滞状況から抜け出すことができるか、その方法について力説しており、具体的には科学知識の習得、教育の改革、積極的労働、農法の科学化(近代化)などを提示している。そこには具体的

9) 例えば、17世紀のアナウペルン王の治世に、蒸気機関の導入が外国人ソロモン・ディコオなる者によって進言されたが、受け入れられなかった等の記述。

な政治的主張は見られず、本文書も『第1号』と連続をなす民族主義的啓蒙文書であることがよくわかる。

『第1号』と『第2号』が出されたその合間にあたる1930年7月、バ・タウンらはのちのビルマ国歌の基になる民族歌を作り上げ、各地で普及のための集会を開くようになった。この歌は「ドバマーの歌」(*Dòubàma Thàhkyîn*)と題され、バ・タウンの発案のもと、YMB タキン・ティンが作詞作曲を担当、タキン・フラ・ボーとタキン・ティン・マウンが補作した。この歌は、のちに歌詞の一部が改作されるものの、タキン党がビルマ人の民族的覚醒を促すため終始活用したもので、タキン党の民族主義的出発点を認識するにあたって重要な特徴を含んでいる。

「ドバマーの歌」は四つの節から構成されており、最も重要と思われる最初の節は次のような歌詞となっている。

タガウン王国 (を建国された) アビラーザー。

我等ビルマ民族は釈迦族の血をひくものゆえ、その誉れと力は不朽なり。

タイやインドと戦いし時、勝利を得た我等ビルマ民族。

王宮の尖塔が薪のひときれと化すのは、この世の理。

我等も同じ運命に出会いし、

されど、元は確かに我等の国、我等の、我等の国。[*Dòubàma Asìâyôun Thàmâin Pyùsùyeyi Ahpwè* 1976a: 24所収のものから翻訳。カッコ内引用者]

タガウン (*Tàgâun*) とは、インドの釈迦族出身のアビラーザー (*Abiraza*) が、西暦紀元前850年に建国したといわれている、伝説上のビルマ最古の王朝である。歌の最初にこの伝説を位置させて、ビルマ民族の宗教的神聖

さを訴え、続いて王朝時代の武力的栄光と繁栄を思い出させようとしている。そして仏教の無常観を醸し出しつつ、本来ビルマが栄光ある国であったことを訴えている。

以下歌詞の詳しい翻訳紹介は省くが、¹⁰⁾ 次の段では伝統あるビルマ民族が、現在世界の中で立ち遅れていることを嘆き、団結と協力を訴え、自分たちこそがビルマの主人（タキン）であることを主張している。続いて第三段目は〈合唱部〉と指示され、「世界の続くかぎり、我等ビルマも共にあり。これぞわが国、これぞわが土地……」[*ibid.*]とあり、この部分は親しみやすいメロディーと共に独立後のビルマ国歌に引き継がれている。最後の段では、「……東方より陽出ずるが如く、我等の時代は確実に来る……」[*ibid.*]と歌い上げて、全体を締めくくっている。

この「ドバマーの歌」もまた、民族意識を促す点において、『国家改革文書第1号』および『第2号』と同じ性格を持っている。しかし、「ドバマーの歌」においてはビルマ人の団結や、ビルマ民族がビルマの主人の座に復活すべきであることを訴えるにあたって、仏教に権威を求めた優越種族意識を活用し、また、かつての王朝時代の栄光を思い起こさせようとするなど、『第1号』や『第2号』と異なる点があり、その点に注意すべきであろう。

以上、タキン党がその最初期に出した2点の文書と、「ドバマーの歌」の内容を見てきたが、これら3点の資料に示された内容から、結成当初のタキン党の思想を特徴づけると、次のようにまとめることができる。

- ①復古的とも言えるビルマ民族・ビルマ文化中心主義を基本としている。（具体的には「ビルマ人のビルマ」という理念を

基に、ビルマ人の団結、愛国心の向上、伝統文化尊重を訴え、仏教に権威を求めた優越種族意識や王朝時代の栄光を想起させながら、ビルマ民族の停滞した現状を憂う。）

- ②立ち遅れてしまった現状からの脱却の方法として、民族の近代化を目指そうとする。（具体的には経済力の増強、科学知識の吸収、積極的労働、科学教育の推進などを訴える。）

- ③独立獲得への意欲は見られるものの、そのための具体的な政治的主張は示されていない。

これら三つの特徴のうち、①にまとめたビルマ民族・ビルマ文化中心主義と、②の民族近代化指向は一見矛盾しているように見受けられる。しかし、②は①の文脈との連続上にあり、例えば『第2号文書』で主張された「運」を意味する *kan* という語の再解釈（本来の“行為”・“作業”という意味の確認）は、伝統的な語句に、より積極的な（近代的な）意味を与えようとしたものであるし、また、科学教育の推進の主張にしても、それは王朝時代以来の寺院学校の改革として訴えられたものである。初期タキン党の中で、①と②は矛盾なくつながっていたと言って良い。

ビルマ民族・ビルマ文化中心主義は、その後、政治団体としてタキン党が成長していく過程で生き残ることになり、社会主義を受容する際も、同党の根幹思想として、その受容のあり方を規定した。特に「ドバマーの歌」が一貫して黨員の間で歌われ続けたことは、同歌が示すビルマ民族・ビルマ文化中心主義が、常にタキン党の思想の根源にあったことを象徴している。次章で論じる「コウミー・コウチーン」という言葉も、このビルマ民族・ビルマ文化中心主義から生まれ出た単語であった。

初期タキン党は1933年1月になると『ドバ

10) 「ドバマーの歌」の全邦訳は[ティン・ベイ・ミン 1988: 66-70]に見られる。

マー新聞』(*Dòubàma Dhàdínzin Hma'tân*)を発行するようになる。週刊を目指し、1部2アナで毎号約1,000部発行したが、同年7月に資金の行き詰まりから廃刊になり、わずか13号までの新聞となった[Khin Yi 1988: 18]。各号を見ると、やはり民族主義的な啓蒙記事が目立つ。しかし、この頃からタキン党が徐々に政治的な主張を始めていたこともわかる。例えば、当時、ビルマ人民族主義者を多く巻き込んでいた印緬分離問題に対する意見表明(2月11日発行第4号)や、両頭制に対する批判的論説(2月18日発行第5号、2月25日発行第6号・3月4日発行第7号)、およびどの政党が貧民を擁護するかに関する見解(3月25日発行第9号)などが見受けら

れるのである。初期タキン党期においてはまだ社会主義思想の影響は見られないが、この時点でわずかとはいえ貧民の擁護をテーマにした記事が見られることは興味深い。なお、外国の思想家や政治家の紹介も見られ、第4号ではヒトラー、ガンジー、ネルーが、第7号ではボリバル、マッツィーニらが紹介され、ルソーなどは4号・6号・7号の計3回も取り上げられている。新聞に載った主要な記事の一部は同年後半、『ドバマー・アスィーアヨウン声明集』(*Dòubàma Asîyôun i Abo*)としてまとめられ、リーフレットの形で有料配布された。

初期タキン党に加わった者や同党を支持した者は、年齢的に言えば20代後半より上の者

表1 初期タキン党指導層

氏名	学歴	親の職業	入党時期・党内での地位
Thàhkin Bà Tháun		宮仕え(マンダレイ)	党創設者(34年脱党)
Thàhkin Hlā Bo	*	商人(シュエボウ)	創設時入党 1938年副議長・39年議長
Thàhkin Thēin Maun	*	弁護士(タウンゲー)	創設時入党 1934年議長・35年書記長 38年議長
Thàhkin Bà Sein	*	商人(ヒンダダー)	1930年末入党・34年書記長 35年議長(38年分派)
Thàhkin Lêi Maun	*	商人(ザガイン)	1930年末入党・34年副議長 36年議長・38年書記長
Thàhkin Han	*	不明	1933年までに入党
Thàhkin Bà Tin		不明(イエーナンチャウン)	1933年までに入党
Thàhkin Htwūn Ou'	*	地主(プローム)	1933年までに入党 36年書記長(38年分派)
Thàhkin Htūn Shwei		弁護士(タウンゲー) Thēin Maunの実弟	1933年までに入党
Thàhkin Nyi		農民(プローム)	1934年までに入党(38年分派)

注) 学歴欄*印は大学・カレッジ出身者を示す。

党内の地位は議長・副議長・書記長のみ記載。他の役職は省略。

出所) [Dòubàma Asîyôun Thāmāin Pyūsūyēi Ahpwè 1976a; 1976b], および Thàhkin Wā Tin, Thàhkin Hkin Nyūn とのインタビュー(共に1986年)から得た情報に基づいて作成。

が多く、学生のメンバーはまだ稀であった。党の規模も小さく、1933年7月に開催しようとした第1回党大会にはわずか6名しか党員が集まらず、失敗に終わっている。¹¹⁾ 結局第1回党大会は1935年3月まで開催できなかった。しかし、その時までには民族詩人として国民から尊敬を受けていたタキン・コウドオ・フマイン (Thàhkin Koudo Hmâin) が入党するなど、タキン党はその支持を着実に広げ始めていた。初期タキン党期の党の指導層は表1の通りであるが、地方都市の中産階級出身者が殆どであり、この点は当時の他の政治団体と基本的に変わることはない。また、タキン党は農村部に浸透して行くにあたって僧侶と組むことが多かったが、この点もGCBA系の政治家・政治団体と似ていたといえる。

IV 「コウミーン・コウチーン」——その出現と初期の使われ方——

続いて本章では、「コウミーン・コウチーン」(Kòumîn-Kòuhkyîn) という言葉について、その出現背景と初期の使われ方を論ずることにする。初めに述べたように、「コウミーン・コウチーン」はタキン党の社会主義受容と密接な関係にありながら、今まで殆どその意味内容を吟味されることのなかった言葉である。

「コウミーン・コウチーン」は直訳すると「我が王・我が種族」といった意味である。この言葉は現在でこそ「独立独歩」・「自分のことは自分で決める」といった意味で使われるが(但し使用頻度は少ない)、使われ始めた頃はもっと復古的な意味合いを持っていた。

11) 失敗の理由については [Khin Yi 1988: 20] に詳しい。しかし、[Taylor 1987: 207] のように、この失敗に終わった党大会の日をタキン党の創設日とみなす見解もある。

た。

最初の使用は1933年11月－12月のシュウェボウ地区選出立法参事会議員補欠選挙に立候補した、タキン・バ・タウンの選挙運動において認められる [Nemoto 1987: 250]。前章で明らかにしたように、当時のタキン党はまだ政治団体としては未熟な段階にあったが、この補欠選挙に参加することによって、彼らはタキン党の思想宣伝を試みようとしたのである。この時は「コウミーン・コウチーン」の定義は特になされず、従ってその言葉は、シュウェボウという、ビルマ民族に王朝時代の栄光を思い出させる町を意識してつけられたか、もしくは当時公安当局が嫌った「独立」(ビルマ語で *lwu'la'yèi*) という直接的表現を避けるために作り出されたものと思われる [Thàhkin Wà Tin とのインタヴュー 1986]。

この補欠選挙でのタキン党の闘い方は、当選を度外視したものであったと言って良く、彼らの思想の宣伝・啓蒙の方がバ・タウンの当選より大きい目的とされた。例えば選挙戦のメイン・テーマであった印緬分離問題に対しては、分離・不分離の論争を乗り越えて、いきなり方法も道筋も提示することなく独立を主張した。また音楽を活用し、タキン・バ・タウンの演説の前後には必ず小編成のオーケストラ付きで「ドバマーの歌」を演奏、歌詞内容を詳細に説明した。運動形態の目新しさから人々は演説会に集まったが、それは票には直結せず、投票の結果バ・タウンは僅か310票、得票率2.2%で最下位となり、落選した。¹²⁾

「コウミーン・コウチーン」はその後、1936年になると文書によって定義づけられるようになる。その年の11月、ビルマでは、翌37年4月から施行される印緬分離に基づく新

12) 初期タキン党とシュウェボウ補欠選挙についての詳細は、[Nemoto 1987] を参照のこと。

表2 タキン党地方支部形成状況
——年別支部数——

	上ビルマ (全18県)	下ビルマ (全22県)	全ビルマ (40県)
1936年 (a)	4 県・1 地区	8 県	12県・1 地区
1937年 (b)	8 県	13県	21県
1939年 (c)	13県	14県	27県

注) (a) 第2回党大会(1936年6月)で設置が決まった全ビルマ執行委員会(各県支部からの代表によって構成)に加わった支部数。

(b) 党憲章制定時(1937年2月)の支部数。

(c) 党主流派に属する支部数。

出所) [Dòubàma Asiàyòun Thànmáin Pyùsùyèi Ahpwè 1976a] および [Khin Yi 1988] を参照して作成。

憲法体制¹³⁾のための、下院総選挙が行われた。この時期、タキン党は地方支部づくりを活発化させ(表2参照)、学生たちの入党も増えつつあった。20年代からのGCBA系の諸指導者が、新党や連合組織をつくって総選挙に参加する中、タキン党も同年6月の第2回党大会¹⁴⁾で総選挙への積極参加を決め、別個に総選挙用の政党をつくり(同7月)、その政党をコウミン・コウチン結社(Kòumín-Kòuhkyin Ahpwè)と名付けた。その際、『コウミン・コウチン結社憲章・規約』(Kòumín-Kòuhkyin Simyin Upàdei Ahkyi)をつくり、同文書において「コウミン・コウチン」を次の様に定義した。

コウミン・コウチン思想とは、自分たちの国において、自分たちの傘、自分たちの宮殿、自分達の国王と共に、堂々と壮麗に華やかにいつまでも住めることを望む思想である。[Kòumín-Kòuhkyin Simyin Upàdei Ahkyi 1936: 1]

ここで言う「傘」とは「白い傘」のことで、王朝時代、国王の五つのregaliaの一つであった。この定義は復古的・情緒的なものであり、初期タキン党の思想の文脈から出てきたことは明らかである。コウミン・コウチン結社は、この定義をもとに、結社の具体的活動目的として次の三つを掲げた[ibid.: 2]。

(イ) ビルマに間もなく与えられようとしている新憲法体制を崩壊させること。

(ロ) 新憲法体制が我が国にとって全く無価値であること、貧しき人々にとって何ら利益のないものであることを……行動を通じて示すこと。

(ハ) 総選挙を利用することによって、ドバマー思想を宣伝すること。

これら3点のうち、(ロ)の「貧しき人々……」の表現は、社会主義思想との関連を思わせる。しかし、実際の選挙運動においては、社会主義思想の影響は全く見られず、「コウミン・コウチン」の復古的な内容によ

13) 新憲法体制では、立法府に上下両院が設けられ、両院共制限つきで法案提出権を有した。一方、行政府としての内閣は英国王に任命される総督と、総督によって指名される10名の大臣から構成され、下院に対して連帯責任を負った。内閣の管轄する部門は両頭制時代より大幅に増え、91部門となった。従って、ビルマでは現在でもこの時期の体制を91部門(部局)体制(Kôuzè ti' Htanà Ou'hkyou'yèi)と呼ぶ。

14) 既に第1回党大会をイェーナンチャウンにて1935年3月に開催していたタキン党は、翌1936年、今度はミインチャンにてタキン・コウドオ・フマインを大会議長にして第2回党大会を開催した。

る定義づけがそのまま反映され、仏教や僧団（サンガ）の権威が徹底的に活用された。コウミーン・コウチーン結社は一般選挙区95のうち28の選挙区に候補者を出したが、例えば、パコウッカー南選挙区から出馬したタキン・アン・チー（Thàhkin Àn Kyi）は、次のような選挙ビラをまいて運動し、得票率22%で当選している。¹⁵⁾

われらのビルマ人がいるということは、彼らのビルマ人もいるということであり、この点に注意されたし。彼らのビルマ人は、われらの仏教を大切に扱わず、尊敬せず、評議会に出入りし、僧侶らを直接的にせよ間接的にせよ支配しようとし、法律などをいろいろ利用して、賄賂を受け取り、人々にはいい顔をし……こういう政党や候補者に十分注意されたし。投票を誤ると仏教が大切に扱われない事態になりかねない。従って、仏教に迫り来る危険から（それを）守ろうとする候補者にのみ投票すべきである。私はパコウッカーの仏教僧団の教えに従い、必ずやすぐに仏教を正しい形で守るべく努力する人物である……。[選挙ビラ DR 4681 (DSHRI): Thàhkin Àn Kyi 1936 カッコ内並びに下線は引用者]

またミインヂャン西選挙区から出馬して四位で落選（得票率13%）したタキン・バ・ニェイン（Thàhkin Bà Nyein）も、次のような文を選挙ビラに書いている。¹⁶⁾

我等ビルマ人こそ主人なり。迫り来る危険に立ち向かえ。死ねば大地、生きれば黄金の傘。……現世の涅槃という最高の食べ物、最高の服、最高の建物などで生活し、人々の好みに応じて楽しくゆとりをもち、

自分たちの宗教の発展がなされる、そのような世の中にしようとする構想を欲しませんか。[選挙ビラ DR 4681 (DSHRI): Thàhkin Bà Nyein 1936]

彼はまた選挙ビラの中で、自分の写真よりも、民族詩人タキン・コウドオ・フマイン（前章参照）や、第2回党大会以降入党したコウンバウン朝の末裔タキン・テイッティン・コウドオヂー（Thàhkin Tei'tin Koudogyi）らの写真を大きく掲げて活用している [ibid.]。王朝の末裔を党の名誉職に据えて選挙を戦うのは、当時他の政党にも見られ、それらは農村部での選挙運動において一定の効果があったものと思われる。

僧団の中でコウミーン・コウチーン結社の支持を訴えたところもある。例えば、ハンタワディー県のサンガは声明文を出し、「票には主人（タキン）の票と奴隷の票の2種類しかない。言い換えれば、仏の票か、でなければ無意味な票（即ち）誤った票の2種類しかないのである」[DR 4681 (DSHRI): Mula Hanthawàdi siyinsu Thanga Ahpwè hkyou'... i Myanmar pyi àtwìnshì Mè hsandàshin àpâundoù à 1936 カッコ内引用者]と述べ、コウミーン・コウチーン結社支持を訴えている。

このようにコウミーン・コウチーン結社は「コウミーン・コウチーン」の言葉の定義にふさわしく、仏教の文脈や僧団の権威を活用する選挙戦術を展開したのであるが、実はこのやり方は他の殆どの政治団体や候補者が用いた、言わば20年代以降ビルマで一般的な選挙戦術であった。DSHRI DR 4681 所収の36年総選挙時の各政治団体・候補者の選挙ビラには、ほぼ例外なくこの特徴が見られる。従って、この戦術だけではコウミーン・コウチーン結社は個性を発揮することができなかった。コウミーン・コウチーン結社がその個性を発揮しようとして最も強く訴えたのは、

15) 得票率は [Singh 1940: 350] より算出。

16) 得票率は [Singh 1940: 349] より算出。

当選しても大臣などの役職に一切就かず（ポスト拒否）、役職に就く者も一切支持しないということであった。この方法を全議員が貫

けば、組閣不可能となり、新憲法体制は内部から崩壊すると彼らは考えたのである。この主張に基づいて、コウミン・コウチン結

表3 コウミン・コウチン結社得票状況
1936年総選挙時

		選挙区 ¹⁾	候補者 ²⁾	得票 順位	得票数	相 対 得票率	当選者の 所属政党	投票率	備 考
上 ビ ル マ	1	ザガイン西	Thi Gyí	5 位	2,391	8 %	五派連合	67%	最下位
	2	同 東	Sein Nyùn	8 位	220	1	五派連合	62	
	3	マグウェー南東	Sôu Tin	4 位	1,369	8	FMP 派	66	
	4	同 北西	Hkyi 'Hlain	3 位	2,174	12	FMP 派	57	当選 善戦 ³⁾
	5	パコウクー南	Ah Kyi	1 位	3,265	22	コウミン・コウチン	50	
	6	同 北	Kyu	2 位	3,091	26	FMP 派	56	
	7	同 西	Hsân Myin	4 位	1,208	7	無所属	58	最下位
	8	ミインヂャン西	Bà Nyêin	4 位	1,947	13	貧民結社	52	
	9	同 東	Mei Aun	3 位	1,363	7	貧民結社	65	
	10	同 南	Êi Kyo	3 位	4,054	24	五派連合	37	
	11	油田労働者代表区	Bà Din	4 位	196	4	五派連合	84	
下 ビ ル マ	12	タヤワディー中央	Kyo Din	4 位	2,487	15	五派連合	49	当選
	13	同 南	Myà	1 位	4,794	37	コウミン・コウチン	51	
	14	同 北	Bà Htwùn	5 位	1,989	11	貧民結社	63	
	15	同 西	Sein	4 位	1,877	15	無所属	60	最下位
	16	タトン 東	Kyi Pei	3 位	1,116	14	FMP 派	42	
	17	タウンゲー南	Kywe	3 位	1,696	9	五派連合	49	
	18	同 北	Maun Hkin	4 位	1,791	13	FMP 派	37	善戦 ⁴⁾
	19	プローム 西	Êi	2 位	8,961	36	五派連合	61	
	20	同 東	Pu	2 位	7,193	28	五派連合	61	
	21	ヒンダダー西	Bà Thân	2 位	4,401	27	五派連合	69	善戦 ⁵⁾
	22	同 東	Hlà Tin	1 位	6,013	38	コウミン・コウチン	60	
	23	ハンタワディー南	Bà Û	7 位	1,031	6	無所属	60	
	24	同 北	Hlà Bo	3 位	1,550	13	五派連合	55	最下位
	25	バセイン 南	Sein Wìn	3 位	1,995	19	五派連合	46	
	26	ピャーボン南	Bà Gwan	2 位	3,001	36	五派連合	46	

注) FMP 派は「フライン・ミャッ・ポオ派」、貧民結社は「貧民ウンターヌ結社」をそれぞれ指す。

- 1) 各選挙区の定数は全て 1。
- 2) 候補者名のタキン (Thàhkin) 敬称は省略。
- 3) 当選者の得票数3,614, 3 位落選者は五派連合 (得票数2,334)。
- 4) 当選者の得票数13,319, 3 位落選者 (最下位) は FMP 派 (得票数2,408)。
- 5) 当選者の得票数11,641, 3 位落選者は貧民結社 (得票数4,784)。
- 6) 当選者の得票数7,621, 3 位落選者は貧民結社 (得票数2,896)。
- 7) 当選者の得票数3,833, 3 位落選者 (最下位) は FMP 派 (得票数1,538)。

出所) [Singh 1940: 341-361], *Myanmà Alin Dhàdīnza* (ミャンマ・アリン新聞) [1936 Nov.], および *Didou'* (雑誌ディードウッ) [1936 Nov. 21: 26-31, Nov. 28: 37-38] を参照の上, 算出・作成。

社はポスト拒否の姿勢を言明しない他党の候補者を批判し、風刺マンガなどを用いて攻撃した。¹⁷⁾

しかし、ポスト拒否まで言明しなくとも、議会の内部から新憲法体制を打破していくという主張は、バ・モオ (Bà Mo) 率いる貧民ウンターヌ結社 (Hsinyêdhâ Wunthanù Ahpwè) や、旧 GCBA 系のフライン・ミャッ・ポオ派 (Hlain Mya' Po Ahpwè) などとも声高に訴えていたので、結局コウミン・コウチーン結社は、この点においても抜きんて個性を発揮できなかったといえる。

コウミン・コウチーン結社は28の選挙区に候補者を出しながら、結果的に当選者は3名にとどまった。各候補者の得票状況は、表3に示すとおりである。(但し、2選挙区については資料が見つからず不明のため、表には26人の候補者についてのみまとめている。) コウミン・コウチーン結社は選挙後、全28選挙区において約8万票を獲得したと発表した。各候補者の戦いぶりについては殆ど分析を行わなかった [Han Tin n.d.: Kòumîn-Kòuhkyîn Ahpwèwin àtwinyêihmù ì Asiyin-hkanza 1936]。

3名の当選者のプロフィールを見てみると、タヤワディー南選挙区で当選したタキン・ミャ (Thàhkin Myà) は、コウミン・コウチーン結社副議長で、二つの学士号をもつ当時40歳の弁護士であった。彼の選挙区内には五派連合並びに貧民ウンターヌ結社の候補者が居なかったばかりか、フライン・ミャッ・ポオ派も候補者を一人に絞る段階で不協

和音を起こし運動が盛り上がりなかったため、選挙戦を楽に戦えた面があった [DR 2548 (DSHRI): Thàhkin Myà 手紙 1936]。ヒンダダー東選挙区から当選したタキン・フライン・ティン (Thàhkin Hlā Tin) は、コウミン・コウチーン結社ヒンダダー県支部長で、当時35歳、セイロン留学経験者であった。彼は貧民ウンターヌ結社および五派連合を破って当選している。全般的に不振であった上ビルマで当選したパコウックー南選挙区選出のタキン・アン・チー (前出) は、タキン党のパコウックー地区幹部で、旧 GCBA チッ・フライン派 (Hkyi' Hlain Gân) の闘士であった。彼の選挙区内には貧民ウンターヌ結社の候補者がいなかったとはいえ、かなり苦戦した跡がうかがえる。

この1936年総選挙で最多数の当選者(46名)を出したのは、旧 GCBA 系の五つの政治結社¹⁸⁾が選挙用に組んでつくった五派連合 (Ngā Hpwin Hsain) と呼ばれる政治団体であった。しかし、内部の統一がとれずに組閣に失敗し、かわりに第2党(当選者14名)に甘んじた貧民ウンターヌ結社のバ・モオが連合政権という形で組閣し、初代のビルマ人首相となった。第3党はフライン・ミャッ・ポオ派が当選者12名で占め、コウミン・コウチーン結社の当選者3名がそれに続いた。以下、貧民奉仕結社 (Hsinyêdhâ Akyôhsaun Ahpwè: 別称フェビアン党)、およびテッパン・ビルマ統一結社 (The'pân Myanma nyinywuyêi Ahpwè) がそれぞれ1名、無所属で当選した者は18名であった(以上一般選挙区

17) 例えば、他政党の候補者達が、英国の船員が乗っている小船から現金(札)で魚(有権者)を釣ろうとしているのに、コウミン・コウチーン結社の候補者だけは離れた岩の上から、「コウミン・コウチーン」と書かれた札で釣ろうとしているマンガなど [Kòumîn-Kòuhkyîn Tidaunhmù Sasù àhma' tì' 1936]。

18) 国民結社 (Pyidhu pyidhâ Ahpwè)、ビルマ独立結社 (Myanmapyi Lwu'la'yêi Ahpwè)、イエイ・ウー僧正指導中央 GCBA (Yei Û Hsàyado kyihmù thò Bàhou gyi-si-bi-ei)、ストライキ派 GCBA (Thàbei' gyi-si-bi-ei) およびマンダレイ21人結社 (Mândâlêi Hna' hsè tì' ũ Ahpwè) の五団体。

のみ)。¹⁹⁾

V 社会主義思想の普及と「コウミン・コウチン」概念の変容

ところで、その後の「コウミン・コウチン」の意味はどのように変容したのであろうか。本章ではつづいて、30年代後半の社会主義思想の普及がもたらした、「コウミン・コウチン」概念の変容について、明らかにしてみたい。

「コウミン・コウチン」の定義は1937年になるとタキン党の姿勢と共に大きく変化する。同年2月、タキン党は結党7年目にし、初めて党憲章「ドバマー思想」(Dòubàma Wadà)を作り上げた。

同意章においては、まず第1条において「ドバマー」(我等ビルマ人)の定義を行い、それを「国内に住む貧困層」、「ビルマ人の血をひく者」および「ビルマの繁栄をドバマー思想(本憲章)に従って追及する者」と明文化した。第2条では「タキン(主人)」を定義し、それを人間の平等な権利の獲得や生活水準の向上に努力する者とした。

続いて第3条ではタキン党が擁護するものとして、「労働者」・「農民」・「貧困層」が明示され、以下4条から6条までは資本主義批判が展開された。資本主義は搾取する者とされる者を生みだし、階層分化を起こした(4条)とし、少数の富裕者や資本家が自己の利益を目的に資本を活用して収益を増やし、彼

らが私有財産を増やせば増やすほど、多くの人は貧困・物不足・下層の苦しみに悩むことになる(5条)とみなしている。従って、そのような少数の資本家の代表からなる政府を消滅させ、人々が裕福に等しく人間としての権利を享受できる新しい体制を作り上げるべきである(6条)と訴えている。

第7条ではタキン党の活動目的が示され、私企業の国有化、富の公平な分配、帝国主義の消滅があげられている。

ここまで見てすぐに気が付くことはタキン党の左翼化である。このような変化の背景には30年代の社会主義文献の流布と共に、1936年に起きた第2次ラングーン大学学生ストライキを機に増えた学生の入党や、学生団体との積極的交流が大きく影響している。しかし、このようになり明確に社会主義思想の影響を示しつつも、党憲章第8条では一転して、タキン党の基本思想として「ビルマは我が祖国、ビルマ文学は我が文学、ビルマ語は我が言語」という、初期タキン党以来のスローガンがほぼそのまま登場する。そして第9条では「コウミン・コウチン」という表現もその姿を現わす。しかし、そこで用いられる「コウミン・コウチン」は、36年総選挙時の『コウミン・コウチン結社憲章・規約』に見られる「コウミン・コウチン」とは意味内容がかなり異なっている。同条では独立の達成と共に、「コウミン・コウチン政策」を推進する政府が樹立されるべきであるとして、以下の様に主張している。

.....コウミン・コウチンをつくりあげるためには独立獲得が先決である。コウミン・コウチンをつくるにあたっては、.....資本家どもによる少数支配をうちたてるのではなく、多数派である貧しき者たちが支配する、すなわち〈貧しき者たちの王、貧しき者たちの種族〉(スィンイ

19) 新憲法体制では、下院132議席のうち、ビルマ人に95議席(=95選挙区)割り当てられ、ここで言う一般選挙区はそれらを指す。なお、残りの37議席は、カレン民族(12議席)、インド人(同13)、中国人(同1)、英緬混血(同2)、ヨーロッパ系(同9)にそれぞれ割り当てられた。人口比から見て、ビルマ人がやや不利に扱われているのに対し、ヨーロッパ系が著しく有利に議席を割り当てられている。

エーダーミン・スィンイェーダーチン：Hsinyêdhâmîn-Hsinyêdhâhkyîn) だけから成る我等ビルマ人による、コウミーン・コウチーン創設でなければならない。[以上直接引用は全て *Dòubàma Wadà* 1937より。下線、〈 〉および () は引用者]

このように、貧しき者たち（スィンイェーダー）による支配の確立を、「貧しき者たちの王、貧しき者たちの種族」（スィンイェーダーミン・スィンイェーダーチン）という、「我が王、我が種族」（コウミーン・コウチーン）から派生した用語によって象徴的に表現し、そうした貧民支配を前提とした「コウミーン・コウチーン」の実現を、タキン党は明言したのである。この意味するところは、社会主義を原則とする独立ビルマ国家の実現である。しかし、そこでは社会主義思想をただ直接的・翻訳的に採り入れて党是とするのではなく、「コウミーン・コウチーン」という独自の民族的表現を活用することによって、民族主義が持つ情念としての魅力と、社会主義が持つ思想としての魅力を、融合させようとしている。この第9条のあと、第10条以降は、コウミーン・コウチーン体制樹立のための方法論（人々の団結を促すこと・選挙への積極参加によって議席を増やすこと・大衆組織をつくりあげること等）が述べられているだけに、この党憲章（全15章）の核は第9条にあると言ってもよい。

「コウミーン・コウチーン」はこうして1937年に定められた党憲章によって、その意味を大きく変えられ、ビルマ民族・ビルマ文化中心主義と、外来の社会主義思想との融合の試みを象徴する語句と転じたのである。

タキン党の思想的キー・ワードとして装いを新たに「コウミーン・コウチーン」は、その後、その使われ方においても社会主義的意味内容を深めていく。特に、1938年末

から始まったビルマ暦1300年の反乱（Htaunthôunya pyì Ayéidopoun）では、そのことがよく示された。

同反乱でタキン党主流派²⁰⁾は、多くの地域から限られた数とはいえ学生・労働者・農民・僧侶を動員して、大衆闘争を展開した。この中で彼らは農民並びに労働者をそれぞれ組織し、²¹⁾ 小作料廃止・負債帳消し・最低賃金保証・週44時間労働制確保・完全独立と労働者の政府設立などを訴えた。その際、39年1月10日に開催された「新憲法体制粉碎全国政治集会」では、議会内においていかなる役職（大臣ポスト）にも就かない、ゼネストを展開する、などの決議を行うと共に、「新憲法体制を粉碎したあと、コウミーン・コウチーン体制をつくるべく」、労働者・農民・学生・僧侶・婦人の組織化に最大限の努力をすべきであることが訴えられている [*Dòubàma Asiâyôun Thâmâin Pyùsùyei Ahpwè* 1976b: 381-382]。また、反乱末期の同年4月に開催されたタキン党主流派第4回党大会においても、党議長のタキン・フラ・ボー（前出）は次のように演説している。

世界の情勢を簡略化して見てみると、資本主義の追従者とファシスト資本家どもが一方にあり、また他方に貧民・労働者・農

20) タキン党は1938年半ば以降、主流派のタキン・コウドオ・フマイン派と、少数派のバ・セイン=トゥン・オウツ派に分裂し、どちらもタキン党を名乗った。分裂の原因は [Khin Yi 1988: 133-134] が証明するように、一般に言われているような、容共（主流派）か反共（バ・セイン派）か、というような単純なものではなかった。詳細は同書参照。

21) 1939年1月9日に全ビルマ農民組織 (*Bàmà Nainnganlôun Hsainya Taundhu Ledhâmà Asiâyôun*) を、同10日には全ビルマ労働者組織 (*Bàmà Nainnganlôun Hsainya Alou'thâmà Asiâyôun*) を結成した [*Dòubàma Asiâyôun Thâmâin Pyùsùyei Ahpwè* 1976b: 375-382]。

民のための共産主義と、奴隷の穴におとされている〈コウミーン・コウチーン〉の民族とがあって、両者が対峙している状況にある。このように、世界のすべての人々が参加せざるを得ない闘争において、我々はどちらの立場に立つべきであろうか。特に言うておかなければならないことは、我々は〈コウミーン・コウチーン〉を欲し、貧民・労働者・農民の解放と人間らしさを望む存在であるということだ。世界中の資本主義と闘っている者、帝国主義体制を打破しようとしている者達全てと団結して行動しなければならない……。[Dòubàma Asiâyôun Thâmâin Pyùsùyêi Ahpwè 1976b: 445 〈 〉は引用者]

このように「コウミーン・コウチーン」は、その使われ方においても、資本主義や帝国主義に対置するものとして、社会主義のイメージを含む、ビルマ独特の民族主義的用語となったのである。

しかし、「コウミーン・コウチーン」は決して「社会主義」のビルマ語訳として使われたのではない。ビルマにおける「社会主義」のビルマ語訳の試みは、36年総選挙の頃から見受けられる。例えば、バ・モオは社会主義を「貧民思想（スィンイェーダー・ワーダ）」（Hsinyêdhâ Wadà）と訳し、自分の率いる政治団体を「貧民ウンターヌ結社」（前出）と名づけた。彼は選挙運動においてこの「貧民主義」を掲げ、5カ年計画と称して、貧しき人々の諸権利の確保、税の軽減、義務教育の実施、農民の負債の調停、耕作権の確保、低利融資の実施などを文書化して訴えた[Han Tin n.d.: 頁記載なし]。しかし、「貧民ウンターヌ結社」という名前の付け方からもわかるように、「ウンターヌ」という「民族の志士」を意味する単語を「貧民主義」に付けて、民族主義と融合したイメージを訴えようとして

いた。

またフェビアン主義者として活動したウー・バ・チョウ（Ū Bâ Hkyou）も、社会主義を「貧民奉仕思想（スィンイェーダー・アチョウサウン・ワーダ）」（Hsinyêdhâ Akyôuhsaun Wadà）と訳し、「貧民奉仕結社（別称フェビアン党）」（前出）を結成して、選挙に参加している。但し彼の場合、選挙直前に同結社を結成したこともあって、選挙に間に合うような形で自分たちの思想を文書でまとめあげることができなかった[*ibid.*]。

このほか、「労働者思想（アロウッタマー・ワーダ）」（Alou'thama Wadà）や、「共同思想（ボウン・ワーダ）」（Boun Wadà）などが次々と社会主義の訳語として登場する。しかし、「共同思想（ボウン・ワーダ）」を除いては、訳語として定着することなく、全て消えていった。「共同思想」も社会主義ではなく共産主義の訳語として生き残り（それも使用頻度は多くない）、後の共産党指導者タキン・ソウ（Thàhkin Sôu）も、はじめこの「共同思想」を社会主義と互換性のある言葉として使用したが、²²⁾ 結局英語の socialism の音訳である「ソウシェーリッ」（Hsousheli'）を使うようになった。結果的にビルマでは社会主義の訳語を創り出すことに失敗し、暫定的に使うはずであった「ソウシェーリッ」がそのまま用いられることになったのである[Taylor 1986: 80-81]。

「コウミーン・コウチーン」はこうした中で、社会主義の訳語としてではなく、タキン党本来の思想的基盤であるビルマ民族・ビルマ文化中心主義から出た完全独立（英国支配の打破）の主張と、外来の社会主義思想から学んだ反資本主義・反帝国主義、およびそこから導き出される独立後の農民・労働者のた

22) タキン・ソウが社会主義について講解している[Sôu 1939]を参照のこと。

めの政府の樹立の3点を象徴する言葉として、使われるようになった。そしてそれは、1930年代末のタキン党の思想の最大公約数を示したものであった。

ところで、タキン党員や学生たちはどのようにして社会主義思想を学んだのであろうか。1937年以前は、バ・モオが個人的に収集した社会主義文献を借りて読んだり、ウー・トゥン・ペイ (Ū Htwûn Hpei) がサヤー・サン (Hsàya San) の遺産を活用して開いた左翼文献の図書館²³⁾ を利用したり、またファーニヴァルのビルマ図書クラブ (前出) から出された社会民主主義関係の文献を読むなどして学んだようである。しかし、それ以降は、よく言われているように、1937年11月に結成されたナガニー出版会 (Nàgani Saou' Athîn) が、ビルマにおける社会主義文献の普及に勢いをつけることになった。同会の執行部はその7人のうち4人がタキン党員であったことが示すように、タキン党と密接な関係にあり、タキン党員や学生たちは同会が出した本 (政治関係55冊、うち約半数は翻訳書) を通じて社会主義をより具体的に学ぼうとした。²⁴⁾

同会の発行した左翼文献は多岐にわたっており、社会主義概説のようなものから、国家社会主義、社会民主主義、三民主義、世界各地の革命運動および革命史 (アイルランド闘争、パリ・コンミュンなど) の紹介、アジア情勢 (日本軍の中国侵略実態の紹介を含む)

の分析等が混ざり合っていた。²⁵⁾

一方でナガニーの本のほかに英訳版のマルクス、レーニンらの著作も党員や学生の一部で熟読され、自信のある者は講師となって学習会などを開催したり、ナガニーで翻訳出版する本の訳者になったりした。²⁶⁾

彼らが社会主義思想に積極的に関心を持った理由は、おそらく近代国家である英国に効果的に立ち向かっていくためには、単に民族主義だけではなく、近代国家理論や政治理論・思想によって武装する必要があると考えたからであろうと思われる。²⁷⁾ そして社会主義思想こそは彼らに英国を帝国主義国家として認識させ、それに対抗していくための反資本主義・反帝国主義の主張を与えてくれたのではないだろうか。しかし、「コウミーン・コウチーン」に示されるような、ビルマ民族・ビルマ文化中心主義によって社会主義を包み込もうとする彼らの姿勢は、社会主義諸思想の正確な理論的把握を妨げ、結果的に民族主義のオブラートに包まれた、社会主義の情念のレベルでの理解しかもたらさなかったと言っている。1939年8月に結成されたビルマ共産党 (Bàma Kwunmyun' Pati) だけはその例外であったかもしれないが、彼らにしても、唯物論を認めるにあたって激しい議論を戦わせたというから²⁸⁾ 党員の間での上座部仏教の影響の強さが窺えよう。

23) トゥーリヤ新聞の記者ウー・トゥン・ペイは、下ビルマ農民大反乱 (1930年-1932年) の首謀者として処刑されたサヤー・サンが著わした緬方医書の出版権を、彼が死刑になる直前に譲り受け、その印税を用いてネルーの『ロシア革命の印象』 (Jawaharlal Neru: *Impression of Soviet Russia*) の中で推薦されているレーニン著作集などの左翼文献を購入し、図書館を建てた [Cornish 1966: 90-92]。

24) 同会の会員数は約1,500人だった。詳しくは、[Kyo Hôu 1975] 参照のこと。

25) 同会が出版した本のリストと簡潔な紹介についても、[Kyo Hôu 1975] が詳しい。

26) タキン・ソウや、コウ・バ・ヘイン (Kou Bà Hein) らはその典型である。

27) これについては [Taylor 1987: 150-152] に展開される分析が興味深い。

28) 元コミュニスト・タキンであるチー・ミャ (Kyi Myà) とのインタビュー (1987年)、およびタキン・ミャ・ツォオ (Thàhkin Mya'Kyo) とのインタビュー (1987年) から得た情報による。なお、ビルマ共産党については別に論ずる予定である。

結論的に言うならば、タキン党が反資本主義・反帝国主義・私企業の国有化・富の公平な分配・農民と労働者のための政府の樹立などを、声高に叫びつづけた背後に、正確な社会主義理論による裏打ちがあったとはとても言えない。しかし、逆説的ではあるが、だからこそ「コウミン・コウチン」はビルマ民族・ビルマ文化中心主義に立つ人々の間で魅力を持ち得たのではないだろうか。

VI 社会主義的情念としての「コウミン・コウチン」(結語にかえて)

「コウミン・コウチン」は日本占領期(1942年-1945年)を経て戦後になると、殆ど使われなくなる。「独立独歩」のような意味で用いられることはあっても、本稿で明らかにしたような意味で使われることは全く無くなった。ラングーン市内にはコウミン・コウチン通りという名の大通りが残されているが、その名を聞いて1930年代後半のタキン党が使った意味での「コウミン・コウチン」を思い起こす人は、もはや殆どいないであろう。そういう意味においては、「コウミン・コウチン」は死語であり、その歴史的使命をとうの昔に終えてしまった言葉である。

しかし、一方、1962年から1988年までのビルマの政治・経済を規定した、ビルマ国軍主導によるビルマ式社会主義(Myanmar Hsousheli)の理念と諸政策を振り返ってみると、そこにはかつてタキン党が「コウミン・コウチン」の下、訴えた、ビルマ民族・ビルマ文化中心主義や、反資本主義、私企業の国有化、富の公平な分配、農民と労働者のための政府の樹立などの諸々の題目が、二重写しのように見られる。無論、これは別個に論じなければならない問題だが、タキン党出身者の多かったビルマ国軍の指導層が、独立

後のビルマ政治のあり方に不満を抱き、1962年の段階で、ウー・ヌ(Ū Nū)体制に絶縁状を突き付けた背景には、かつての「コウミン・コウチン」に象徴されたような、民族主義と混ざり合った情念のレベルでの社会主義理解と、それに対するあこがれ、およびその実現への使命感が存在していたのではないだろうか。「コウミン・コウチン」は死語と化したものの、その表わすところの社会主義的情念は戦後も生き残り、ビルマ式社会主義に流れ込んだという仮説は、今後の研究課題として価値を持つはずである。

謝 辞

本論稿は1987年12月7日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所でおこなわれた、共同研究プロジェクト「東南アジアの自生的思考」の研究会において発表したものが基本となっている。発表の際、貴重な助言を下された方々に厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- Bà Hkain, Ū. 1937. *Myanma pyi Nainnganyei Yazawin*. Rangoon: Htwūn Ēi Saou' Hpyānhkyēi Htanà.
- Cornish, Richard J. 1966. *The Development of Nationalism in Burma: 1900-1940*. Master thesis submitted to the Faculty of the School of International Service of The American University, Washington D.C.
- Dīdou'màgàzin. 1936 November 21, 28. Rangoon: Dīdou' Māgāzindai'.
- Dòubàma Asīyōun i Abo. 1933. Rangoon: Dòubàma Asīyōun.
- Dòubàma Asīyōun Thāmāin Pyūsūyēi Ahpwè. 1976a. *Dòubàma Asīyōun Thāmāin pāhtāmā twé*. Rangoon: Sapei Bei' man.
- . 1976b. *Dòubàma Asīyōun Thāmāin dūtīyā twé*. Rangoon: Sapei Bei' man.
- Dòubàma Dhādīnzīn Hma'tān àhma' 1-13. 1933. Rangoon: Dòubàma Asīyōun.
- Dòubàma Wadā. 1937. Rangoon: Dòubàma Asīyōun.
- DR 2548 (DSHRI: Defence Services Historical

- Research Institute). Thahkin Myà htan hmà ywèikau'pwè àhkyeànei hnìn pa'the'ywè mibàmyà htan thòu yéithà thò 13-9-36 nèiswè pa pèisa.
- DR 4681 (DSHRI). 1936 hkù Nouwinbalà àtwin kyìnpà thò mîntain pin àma' ywèikau'pwè àtwe' nainnganyèi àthîn àhpwè àthidhî hmà àma' pàunmyà ì mèhswe sadànmýà kyeinyahkye'mýà.
- Êi Thida, Do 1980. 1930 mâtainmi Myanma Nainngan twîn thòu Hsousheli' Sapei Pyànmmù lahkyîn. *Te'kàthou Pinnya Pàdeitha* 14 Rangoon.
- Han Tin, Sàgân, ed. n.d. Myanma Nainngando Hma'tân Vol. 6 (Unpublished)
- Khin Yi. 1988. *The Dobama Movement in Burma (1930-1938)*. New York: Southeast Asia Program, Cornell University.
- Kòumîn-Kòuhkyîn Ahpwè ì Sîmyîn Upàdei Ahkyî*. 1936. Rangoon: Kòumîn-Kòuhkyîn Ahpwè.
- Kòumîn-Kòuhkyîn Sadân* àhma'ti 1936. Rangoon: Kòumîn-Kòuhkyîn Ahpwè.
- Kòumîn-Kòuhkyîn Tihdaunhmù Sasù* àhma'ti 1936. Rangoon: Kòumîn-Kòuhkyîn Ahpwè.
- Kyo Hôu, Û. 1975. *Nàgani Saou' Athin Htou' Sasù Sayin*. Rangoon Arts and Science University, Library Department thesis.
- Moscotti, Albert D. 1974. *British Policy and the Nationalist Movement in Burma, 1917-1937*. Hawaii: The University Press of Hawaii.
- Myanmà Alîn Dhàdînza*. 1936 November. Rangoon: Myanmà Alîn Dhàdîndai'.
- Nainnganpyù Sasù* ahma'ti 1930. Rangoon: Dòubàma Asîâyôun.
- . àhma'hni'. 1930. Rangoon: Dòubàma Asîâyôun. (Xerox Copy)
- 根本 敬. 1985. 「ビルマ独立闘争における内的連続と外的インパクト——タキン党の形成と日本占領期をめぐる史的考察——」国際基督教大学比較文化研究科提出修士論文. 東京.
- Nemoto, Kei. 1987. *The Dòubàma Asîâyôun and the Shweibou Bye-election (1933)*. In *Burma and Japan — Basic Studies on Their Cultural and Social Structure*, edited by Burma Research Group. Tokyo.
- Singh, Ganga, compiled. 1940. *Burma Parliamentary Companions*. Rangoon: British Burma Press.
- Sôu, Thàhkin. 1939. *Hsousheli' Wadà*. Rangoon: Saou' Hpyànkhkyiyei.
- Taylor, Robert. 1986. *Burmese Concepts of Revolution*. In *Context Meaning and Power in Southeast Asia*, edited by M. Hobart, and R. Taylor. New York: Southeast Asia Program, Cornell University.
- . 1987. *The State in Burma*. London: C. Hurst and Company.
- テイン・ペイ・ミン. 1988. 『東より日出ずる如く』(上) 南田みどり (訳) 東京: 井村文化事業社. (原著 Thèin Hpei Myin. *Ashei gà Neiun Htwe'tè pàma*. Rangoon. 1958.).
- Thuriyà Dhàdînza*. 1936. November. Rangoon: Thuriyà Dhàdîndai'.
- Tin Htwûn Aun, Û. 1980. *Myanma Nainnganyèi hnìn Thàhkin BàThâun*. Rangoon: Zàbeû Sapei Hpyànkhkyiyei.

インタビュー

- Hkin Nyùn, Thàhkin. 元主流派タキン党员. 1986年10月18日, ラングーンにて.
- Htwûn Tin, Bouhmù. 元人民革命党员. 1987年4月・5月. ラングーンにて.
- Kyi Myà, Û. 元コミュニスト系タキン党员. 1987年9月5日, マンダレイにて.
- Mya' Kyo, Thàhkin. 元コミュニスト系タキン党员. 1987年9月5日, マンダレイにて.
- Sein Wîn, Û. シュウェボウの元中学校長. 1986年9月4日, シュウェボウにて.
- Wà Tin, Thàhkin. 元バセイン派タキン党员 (初入党組). 1986年10月18日, ラングーンにて.
- (注) インタビューは全てビルマ語で行なった.